様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：８４６０４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００７５２

研究課題名（和文）和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study concerning the production and distribution of Wado-kaichin

研究代表者
松村　恵司（MATSUMURA, Keiji）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・客員研究員

研究者番号：２０１１３４３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、全国の和同開珎出土遺跡（784遺跡、出土総数6362点）の正確な分布図を古代の国単位に作成し、駅路、駅家、国府などとの位置関係から、和同開珎出土遺跡の性格を探り、古代銭貨の流通が都城と畿内周辺国に限られたとする従来の通説的理解の検証を試みた。その結果、和同開珎出土遺跡が駅路沿いに分布する傾向が明確になり、畿外における銭貨流通が駅路沿いに展開した可能性が高まった。
これは当時、社会問題化していた調庸運脚や役夫の帰郷時の飢苦を救済するために、彼らに銭貨を所持させ、旅の途次に食糧を購入できるシステムの整備を企図した律令国家の貨幣政策を反映した現象とみられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの初期貨幣史研究は、古泉学や社会経済史学を中心に進められてきたが、本研究は出土銭貨が内包する遺跡情報に焦点をあて、出土銭貨から貨幣流通の実態解明に迫ろうとする考古学の新たな試みである。律令国家の貨幣政策により、物品貨幣から名目（法定）貨幣への転換がどのように図られ、名目貨幣である銭貨がどのように社会に受容されていったのかという貨幣の本質に迫る研究でもあり、現在の法定貨幣の社会的信認の形成史を探る上でも重要な研究である。

研究成果の概要（英文）：This research made an exact distribution map of Wado-Kaichin excavated from 784 sites in Japan, and verified the conventional understanding that the distribution range of ancient coins has been limited to the vicinity of the Capital and Kinai（畿内）. As a result, it was found that there is tendency which the distribution range had expanded along Ekiro（駅路）.
The situation of farmers who Carried tax goods to the capital, they starved on their way home, became a social problem. Because of this, the Ritsuryo nation in order to save them from the suffering of starve, let them have coins and built a system that allows them to buy food during their trip. Thus, I consider think it is a phenomenon that reflects the monetary policy of the Ritsuryo nation.

研究分野：考古学

キーワード：出土銭貨　和同開珎　無文銀銭　富本銭　貨幣史　貨幣経済　流通銭貨　鋳銭

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１：研究開始当初の背景

1999 年の飛鳥池遺跡の富本銭の発見を機に、わが国の初期貨幣史研究は新たな研究段階へと突入した。研究代表者はこれまでに科学研究費補助金の助成を受けて、飛鳥・藤原宮、平城宮といった律令国家中枢部の出土銭貨を対象に、古代貨幣史の再構築に向けた一連の研究を進めてきた。その結果、我が国の初期貨幣が、新羅の一分銀とみられる無文銀銭（７世紀第３四半期を中心に流通）の貨幣的使用から、初めての中国式鋳造貨幣富本銭の発行（683 年）、銭貨の全国流通を目指した和同開珎の発行（708～760 年）へと発展する歴史的過程を明らかにした。また、鋳造銅貨を基軸に据えた貨幣経済の導入が、唐の制度を模倣した律令国家体制の整備と深く関わり、藤原京や平城京などの中国式都城の建設と一体的に富本銭や和同開珎が発行された可能性を指摘し、これらの研究成果は広く社会に認知されるようになった。

２：研究の目的

これまでに進めてきた研究は、初期貨幣の研究史の整理、無文銀銭の性格や製作地の究明、富本銭の鋳造技術の復元、富本銭の銭文の出典研究、和同開珎の銭文の読み方や意味の解明などに重点を置いたため、2007・2008 年度に膨大な労力を割いて収集した和同開珎出土遺跡の全国集成資料（784 遺跡、出土総数 6362 点）を十分に分析し、研究に活かしきれない状況にあった。このため本研究では、集成資料の考古学的分析を通して、古代銭貨が都城と畿内、及びその周辺国を中心に流通したとする従来の通説的理解を検証し、国家が一方的に社会に投入した名目貨幣の地域における受容の実相と、流通実態の解明を研究の目的とした。

３：研究の方法

(1) 古代の地理的、歴史的環境下で和同開珎出土遺跡の性格を考察するため、旧国単位に駅路と駅家、郡境、国府、国分寺の位置を入れた国郡図をデジタルトレースし、そこに地図ソフトを使用して和同開珎出土遺跡（784 遺跡）の正確な位置を落とし、和同開珎出土遺跡分布図を作成する。

(2) 奈良文化財研究所が公開する古代地方官衙関係遺跡データベースと古代寺院遺跡データベースを利用して、官衙関係遺跡と古代寺院跡の分布図を作成し、さらに並行して、在地における有位者の存在を示す銅製帯金具の出土遺跡分布図を作成する。

(3) 完成した古代地方官衙関係遺跡・古代寺院遺跡分布図、銅製帯金具出土遺跡の分布図を、和同開珎出土遺跡分布図と重ね合わせて比較対照し、和同開珎出土遺跡の性格を考察する。

(4) 日本古代貨幣史の全体像を把握するため、古代銭貨の発行、流通に関する文献史料を網羅的に集成し、編年整理して基礎資料を整備する。

(5) 公開した「和同開珎出土遺跡データベース」の充実を図る。

４：研究成果

(1) 和同開珎出土遺跡と官衙関連遺跡・古代寺院跡、帯金具出土遺跡の分布図を比較対照した結果、三者が相互に密接に関連しつつ、駅路沿いに分布する傾向が明確になった。

(2) こうした現象は、和銅初年に相次いで出された律令国家の貨幣使用奨励策、そのなかでも特に運脚夫や役夫の帰郷対策と密接に関係するとみられる。すなわち、調庸運脚や役夫の帰郷時の飢苦を救済するために、彼らに銭貨（軽貨）を所持させ、郡司や富豪の家に交通の要所で米の販売を命じた和銅５年（712）10月乙丑条や、翌６年３月壬午の詔との関係が推測され、これを契機に銭貨を交換手段とする交易が駅路沿いに進展したと考えられる。

(3) 地方出土の和同開珎は、地方官衙関連遺跡や豪族居館からの出土例が多く、駅路沿いの交易が和銅５年の詔が命じたように郡司や富豪層によっておこなわれた可能性を示唆する。また和銅４年の蓄銭叙位法や、蓄銭を郡司の遷任条件とした和銅６年の詔が、地方豪族の銭貨獲得意欲を高める契機になったと考えられる。

(4) 北陸道の和同開珎出土遺跡の分析では、奈良時代銭貨が平安時代の地鎮や建築儀礼に伴う銭貨埋納に用いられる例が多く認められた。駅路沿いの交易で銭貨を入手した地方豪族は、それを蓄蔵することで富を競い合い、延暦17年（798）や貞観9年（867）の蓄銭禁止令にみるように、律令国家が企図した全国的な銭貨流通を阻害し、京畿内の銭貨不足を招く要因となったことを物語る。このように本研究によって、考古資料と文献史料の整合的な解釈と理解が可能となった。

(5) 古代の権衡制度の復元に向けて、中国の研究論文の翻訳作業を継続し、日唐の出土銀鋌と重量表記のある金銀器の集成作業を進めた。重量表記のある正倉院の銀器と銅鏡の分析を通して、日本の斤両分銖のグラム値（現今重量）を復元した結果、日唐間で同じ基準の権衡が用いられていた事実を確認することができた。

(6) 2016年に奈良文化財研究所ＨＰ上で公開した「和同開珎出土遺跡データベース」に、研究代表者が執筆した和同開珎に関する主要論文を追加掲載した。

(7) 令和２年３月に、研究集会『和同開珎の生産と流通をめぐる諸問題』の記録集である『和同開珎の生産と流通（二）』（A4 版、175 頁）を刊行した。

(8) 銭貨流通に関わる「銭・文・貫・市・廛・店・銀・銅」と記された木簡 765 点を集成し、その釈文編と、木簡の属性をまとめた木簡詳細情報編、巻頭写真図版を作成した。また、集成作業を通して明らかになった諸点を「古代銭貨関係木簡解説」として文章化し、令和３年３月に『古代銭貨関係木簡集成』（A4 版、本文 246 頁、写真図版 10 頁）を刊行した。

(9) 令和 3 年度が研究の最終年度にあたることに鑑み、これまでの科学研究費補助金による研究代表者の一連の研究成果と、今後に残された課題の整理を目的に、既刊の研究成果報告書に執筆した研究代表者の論考をとりまとめた『初期貨幣関係科研論考集』（A4 版、本文 273 頁）を刊行した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 松村恵司	４．巻 第40号
２．論文標題 「木簡からみた古代の緡銭」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『出土銭貨』	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村恵司	４．巻 二
２．論文標題 「畿外の銭貨流通を考古学から探る-北陸道出土の和同開珎-」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『和同開珎の生産と流通』	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村恵司・小泉武寛・小泉裕司	４．巻 第38号
２．論文標題 「無文銀銭の復元製作実験」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『出土銭貨』	６．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村恵司	４．巻 1
２．論文標題 「北陸道出土の和同開珎－畿外の銭貨流通を考古学から探る－」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『和同開珎の生産と流通をめぐる諸問題』研究報告資料集	６．最初と最後の頁 1～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松村恵司	4．巻 1
2．論文標題 「古代銭貨関係木簡解説」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『古代銭貨関係木簡集成』	6．最初と最後の頁 1～29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松村恵司	4．巻 第42号
2．論文標題 「古代権衡の復元（上）」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『出土銭貨』	6．最初と最後の頁 19～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計3件

1．著者名 松村恵司	4．発行年 2021年
2．出版社 奈良文化財研究所	5．総ページ数 256
3．書名 『古代銭貨関係木簡集成』	

1．著者名 松村恵司	4．発行年 2020年
2．出版社 奈良文化財研究所	5．総ページ数 173
3．書名 『和同開珎の生産と流通（二）』	

１．著者名 松村恵司	４．発行年 2022年
２．出版社 奈良文化財研究所	５．総ページ数 273
３．書名 『初期貨幣関係科研論考集』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

奈良文化財研究所ホームページ
https://www.nabunken.go.jp/

和同開珎出土遺跡データベース
http://mokuren.nabunken.go.jp/wadou/index.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関